

イエジマチャセンシダに就てはすでに昨年報告しておいたが⁽¹¹⁾、最近沖縄縣の多和田眞淳氏の好意により伊江島産の標本を寄贈せられたのでヒメチャセンシダと精細に比較することができた。本種はヒメチャセンシダに頗るよく似たものであるが、全體に繊細で葉柄や中軸の太さは半分にも満たず、羽片は長さに対して幅が廣く、又逆行する程度が少々強いので中には扇形を呈するものもある。葉質も比較的薄いやうである。故にヒメチャセンシダの變種として學名を次の如く改めやう。

Asplenium oligophlebium BAKER var. **iezimaense** TAGAWA, comb. nov.

Asplenium iezimaense TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. II. p. 200 (1933).

Asplenium Fauriei (non CHRIST) KODAMA in MATSUMURA, Ic. Pl. Koisikav. I. p. 89, Pl. 45 (1912);—MAKINO & NEMOTO, Fl. Jap. p. 1580 (1925);

Nom. Jap. Iezima-tyasensida. イエジマチャセンシダ

Hab. Ryukyu : insl. Ie-zima (S. TAWADA, no. 91, Dec. 26, 1933).

- (1) HOOKER & BAKER, Syn. Fil. 275 (1867).
- (2) FRANCHET & SAVATIER, Enum. Pl. Jap. II. 241 (1876).
- (3) MOORE in Gard. Chr. 1863. 292.
- (4) BAKER in HOOKER & BAKER, Syn. Fil. ed. 2, 254 (1874).
- (5) MAKINO in Bot. Mag. Tokyo, X. 286 (1896).
- (6) MAKINO in Bot. Mag. Tokyo, XV. 64 (1901).
- (7) ROSENSTOCK in FEDDE, Repert. XIII. 130 (1914).
- (8) CHRIST in Bull. Herb. Boiss, sér. 2, 1021 (1901).
- (9) KUNZE in Bot. Zeit. VI. 572 (1848).
- (10) NAKAI in Bot. Mag. Tokyo, XXXIX. 117 (1925).
- (11) TAGAWA. in Acta Phytotax. Geobot. (植物分類地理). II. pp. 200, 217 (1933).

傳説の植物「御綱柏」

宇井 縫 藏

一、御綱柏の名の文献にあらはれた最初は古事記であつて、高津宮中巻に「自此後時太后、爲將豊樂而、於採御綱柏、幸行木國之間、天皇、婚八田若郎女、於是大后、御綱柏積盈御船還幸之時云々」とあり、日本書紀にも「仁徳天皇、三十年秋九月乙

卯朔乙丑、皇后遊行紀國、到熊野岬、即取其處之御綱葉而還云々」とある、之によると、仁徳天皇の皇后が豊明^{とよあかり}したまはんがためにわざわざ浪速の都から紀伊潮岬まで御綱柏を採りにお越し遊ばされたといふのである。

古事記傳によれば、御綱とは三綱（君臣父子夫婦）の意であると書いてあるが、皇太神宮儀式帳には御角柏、延喜式卷第四十には三津野柏とあり、また長柏など、和歌によんでゐる。

二、御綱柏を何に用ひられたか、壬二集に「萬代もなほ長月の空にあふみつのがしはにみき奉る」とあるやうに、神をまつられる時や朝廷の御宴に供物や酒を盛るにはなくてはならぬものであつたらしく、また神事の占ひにも用ひられたといふ事は、續古今集の「思ひあまりみつのがしはにとふ事の沈むに浮くは涙なりけり」といふ和歌によりても知られる。

三、然らばこの御綱柏とは果して何かといふ事については古來國學者や本草家によつていろいろ考究せられたやうで、多くの異説がある、殊に紀州の生んだ徳川末期の本草學者畔田伴存翁の如きは深く研究考證せられ、その著古名録や熊野物産初志などにはそれについての多くの記事がある。

昔から御綱柏にあてられた植物は大體五つあつて、

其一はアカメガシハといふ説である、徳川時代や明治に入つてからも、神宮でも諸國民間に於ても、神をまつる時に御綱柏の代用として用ひられたもので、紀州地方にもゴシヤバ（御菜葉の轉訛）とかサイモリバ（菜盛葉）とかいふ方言がある。併し之が眞の御綱柏でないのは、落葉樹である事と何地にも産するものである事によつてわかる。

其二はカクレミノといふ説であつて、之も御綱柏の代用として用ひられ、一時之を眞物と信じられた時代もあつたらしい、畔田伴存翁が文政七年に内宮の神官に問合せた時、三角柏と認めてカクレミノの葉十枚差越せりと古名録い書いてあつて、此は全く眞の三角柏を秘して此偽品を送れるなりと附記してゐる、この植物も廣く暖地に産するものゆゑ御綱柏にあてる事は出来ない。

其三マルバチシヤノキといふ説で、之は今でも熊野潮岬で御綱柏としてゐる、この説は可なり古い時代からのやうで、古名録に伴存翁が文政の末年紀伊侯の命を受けて熊野に到り潮岬神社の神官に就いて尋ねし時示されたのはこの木であつたやうで、伴存翁はその木は質問本草の金連子でありとし、其樹丈餘に至り大さ股の如しと記し、熊野物産初志第二に、金連子（ミツナカシハ潮岬方言）とあつて、その記載と葉の寫生圖を載せてゐるがそれが正しくマルバチシヤノキであつた事が判る、

そしてその記事の中に「此樹潮岬に限り生じ他地に無之を以て御綱柏と好事者附會するものなり」とある、又紀伊國續風土記物産の部に御綱柏の事を記せる中に「今牟婁郡潮崎莊潮御崎にて御綱柏といふものあり」と載せたのはマルバチシヤノキのやうで同書にも之は眞物にあらずとし、これは元祿の頃京都の人此所に來り妄に三角柏に充てしより土人却りて眞の三角柏を知らざるなりと書いてある、實際この木を御綱柏とする事の非なるは、元來この樹は紀州の自生でなく徳川時代ごろ臺灣あたりからの移植と考へられる事で、現今紀州では僅に潮岬と那智とに栽植せるものしか見られない事と、之が落葉樹である事も御綱柏と出來ない點である。

其四はホウロクイチゴといふ説で、之は畔田伴存翁の主張である、熊野物産初志には、カシハイチゴの處にその形態を詳記せる後「大邊路江住より潮岬に至るの間山谷に多し、日本書紀にいふ御綱葉と云此也」と記し、宮川日記の三綱柏の圖を引證し、「夫本抄三綱柏の註にも、かづらのやうにて生たるを登りて截おろすと云へり然則三綱柏は蔓草たる證にして即ちカシハイチゴなる事明也」とある、伴存翁のカシハイチゴといふものはその記載や圖によりて之がホウロクイチゴの事とわかるが、此植物は紀州にては田邊以南に分布し殊に周參見より潮岬地方へかけて多く、彼の艶やかな大きな葉をつけた植物の一面に繁茂せる様を見れば、しか考へられぬ事もない。

其五はオホタニワタリといふ説である、之は故白井光太郎博士の強調せられたものであつて、昭和四年七月發行の植物研究雜誌上で御綱柏とは何ぞやと題し、鴨の長明が伊勢の記にある三角柏の記事中の「長柏とも云にや寂阿法師百首歌の中に、思ふ事とくのお島の長柏長くもたのむ廣きめぐみをと いへりかやうに聞けど未だ其すがたをば見ず此日或人の許より贈れり 柏のやうにて廣さ三四寸長さ三尺ばかりまことに常の本草の葉には似ず」といへるを引き、幅三四寸長さ三尺許りの葉といへばオホタニワタリの外にあるべからず、御綱柏は必然オホタニワタリに決すべしといはれた、さすがに白井博士にあらざればオホタニワタリとは氣付かれまいと敬服せざるを得ない、全年十一月發行の植物研究雜誌で牧野博士は白井博士の説に基きて、内地産のオホタニワタリの和名をミツナガシハとし、その學名も *Asplenium antiquum* MAKINO と改められたが、この種名は昔神事に用ひられたといふ意である、併し御綱柏のオホタニワタリであるといふ説に直に首肯出來ない點は、白井博士の引證せられた伊勢の記の同じ記事の中に「木の上にかづらのやうにて生たるをのぼりてきりおろす時ひらに伏て落ちたるをば取らず豎さまに落たるばかりをとる云々」とある事である、或人の許より贈り越せりといふ葉は多分オホタニワ

タリであつたであらうが、之だけで直に古事記の御綱柏をオホタニワタリと断定するのは多少の無理がありはしないかと思はれる。

四、以上で御綱柏の何であるかといふ諸説を述べ盡したつもりであるが、果して何れが真か。

私は古事記や日本書紀にある御綱柏といふものは結局傳説の植物として見るのが穩當であるまいかと思ふのである、古書に確かな形態の記載がないのであるから、後になつて之を何植物であると判定せんとするのは頗るむづかしい問題といふよりも寧ろ不可能であるといふべきである、伊勢の記でも宮川日記でも後世の人の書いたものであるから、之等の書物に御綱柏といつてゐるものでもそれが果して古事記や日本書紀にあるものと同じものであるかどうかは永久に解けない謎として残るものとししか考へられないのである。

抄 録

ブーランガー氏：—東亞薔薇屬合體花柱類再檢 (G. A. BOULENGER :—Revision des *Roses* d'Asie de la Section des *Synstylae*. in Bull. Jard. Bot. de l'État, IX. fasc. 4, 1933. p. p. 203—279.)

著者はベルギーで自分の手元に CREPIN氏所藏薔薇屬の標品を有すると云ふ所から斯かる仕事をやつたものだらふが、其 Revision のあとは、めちやめちやである、よく我念の強い未熟な分類家が澤山の標品も持たずに往々かゝることをするものであるが、又同時に歐洲の分類家は最早、日本植物に手を出さず資格のなくなつた事を十分にあらはしてゐる、此氏の Revision の如きは日本植物家の唯一笑を買ふのみであらふ。(G. K.)

秦仁昌：—支那蕨屬 (R. C. CHING :—*Sinopteris* CHING, nov. gen. in Fan. Mem. Inst. Biol. Peiping, China, vol. IV. no. 10, 1933. p. 359. t. 1-2.)

秦仁昌氏は四川、雲南、直隸の地方に於て支那蕨屬 (*Sinopteris*) を新に設立せり、本屬植物は一般習性及び外部形態に於ては頗るヒメウラジロ (*Cheilanthes argentea*) に類似せり、然れども到細に研究すると總ての裏星科植物 (Polypodiaceae) より全く異なるものなり、即ち本屬植物の孢子嚢は葉脈の先端に於て獨生し極めて稀に双生し、縁包膜にて被るもので、囊堆は單一子嚢より成るものである、Monangiae Sorus は原的性質で *Botrychium* や *Mohria* (Schizaeaceae) の如き下等羊齒に見る事で裏星